田辺市立美術館NEWS

ORANGE

Vol.34

潮隆雄《夕凪-A》1997(平成9)年　田辺市立美術館蔵

作品紹介　潮隆雄《夕凪－A》

潮隆雄（１９３８～２０２１）は６０年間にわたって、タピスリーの制作を自らの表現の手段とし、織の技を練達させながら制作を重ねた。当初は抽象形態の構成による内省的、抒情的な作品によって、タピスリー作家としての地歩を築いたが、やがて自然との交わりの中で得たモチーフを主題にした、スケールの大きな作品の制作へと移ってゆく。この変化とともに、織の技法も独自のものを含めたより高度なものへと磨かれていった。
《夕凪－A》に表される島影は、潮の好んだモチーフの一つだが、実際の島を写したものではなく、郷愁を帯びた心象の景だと聞いている。水面と空気は、綴織と巻織を駆使した色彩の階調で繊細に表され、それに取り囲まれる島と雲の力強く引締った造形は、独自の浮織、輪奈織による質感の効果を伴って、鮮やかな印象を与える。
潮は洗練された技法と構想をもって織特有の表現を活かしきり、このタピスリーに、夕凪の一刻が生み出す情感を満たすことに成功した。

作者の潮隆雄さんは今年１月１５日に逝去されました。ここに謹んで哀悼の念を表します。

（学芸員　三谷　渉）

REPORT 「版画の表現」

昨年の10月から11月にかけて、熊野古道なかへち美術館を会場に小企画展「版画の表現」を開催しました。当初の計画ではこの時期に特別展「土屋仁応　森の神話」を開催する予定でしたが、新型コロナウイルス感染症の影響でやむなく延期することとなり、その代替となったものです。

ちょうど昨年、2020年が和歌山にゆかりのある版画家、浜口陽三（はまぐち・ようぞう／1909～2000）の没後20年、前川千帆（まえかわ・せんぱん／1888～1960）の没後60年にあたる年であったこともあり、この機会にその作品を特集して紹介し、木版、銅版、石版などの多彩な手法が洗練されて展開した、国内外の近現代の作家による版画の世界をお伝えする内容とすることを考えました。

現在の和歌山県有田郡広川町に生まれた浜口陽三は、廃れかけていたメゾチント（銅版画の技法の一つ）による表現を追求し、独自に4色の版を重ねるカラーメゾチントを開発して、その作品が国際的に高く評価された版画家です。展覧会では、1950年代後半から1970年代後半までの充実した制作時期の作品15点を展示し、静謐で深い情感を湛える浜口の芸術をお伝えするコーナーを設けました。

前川千帆は日本各地を旅して、その風景を作品にした木版画家で、和歌山県にも度々来ています。展覧会では、代表作の一つである、全国の温泉を旅してその風景をまとめた『版画浴泉譜』シリーズから、戦後に出版された『続々版画浴泉譜』に収録されている当地の温泉を描いた作品を紹介しました。湯の峰、川湯、白浜、椿などの温泉地の半世紀前の情景が、味のある木版画で表されています。

この他にも、叙情的で物語性の強い内容を、緻密な木口木版で表現する柄澤齊（からさわ・ひとし／1950～　）の肖像シリーズや、北欧の画家エドワルド・ムンク（1883～1944）の透明感のある彩色を施した木版画、ポップアートを代表する作家ロイ・リキテンスタイン（1923～1997）のリトグラフ（石版画）など、多彩な版画作品を展観しました。

急な予定変更による展覧会の開催にも関わらず、ご理解をいただき、貴重な作品をご出品くださったご所蔵者の方々、ご来館ご鑑賞いただいた方々に、この場をお借りして改めて厚く御礼申し上げます。

（学芸員　知野　季里穂）

前川千帆による当地の温泉を描いた木版画をまとめて紹介しました

田辺市立美術館へのきもち㉔

たくさんの花が咲く公園を前にたたずむ建物。中村彝が描いた《帽子を被る少女》。佐伯祐三の《扉》。田辺市立美術館について、私がまず思い浮かべるのはこの三つである。

手入れされた花壇を見ながら美術館に入り、受付を経て展示室へ。展示室は作品保護のため照度を抑えねばならないが、明るい太陽光が降り注ぐ公園から、少しずつ暗さに慣れ、展示室の壁に向かって立つ頃には、そこに掛けられた作品の世界に集中する。

中村彝の少女像は、自らの死を予感して描いた油彩画で知られる彼の画業のなかでは珍しい、屈託のない愛らしい小品だ。少女はちょっぴり気が強そうで、まっすぐなまなざしをこちらに向けている。この作品を見ると、短い時間であれ、彼が幸せに画面に向かうことができた瞬間があったのだと、どこか安心するような気持ちになる。

《扉》は佐伯祐三がその短い生涯の最晩年に描き、「最高に自信のある作品」と述べた1点。ただ扉だけを正面から描いた油彩画だが、超越的な迫力がある。彼の絵は素早く走るような線が特徴的だが、実際にある扉と絵を見比べると、佐伯はそこにないものは何一つ描いていないことに驚嘆する。余計な線など一本も描かれていないのである。形を捉える眼と感性、それに即応し筆を動かす手。鬼気迫る様相でパリの街角に立つ佐伯の姿が浮かんでくる。

田辺市立美術館にはこうした珠玉と言うべき作品がある。このような作品を中心に、作品や作家、時代を深掘りした展覧会の実現を続けてほしい。

一方、熊野古道なかへち美術館は、2003年に小林孝亘の個展が開催されていた際、展示室で東京からやってきていた旧知の学芸員や作家たちと出くわし、久しぶりの再会を喜んだことがある。そこでしか見ることのできない展覧会には、どんなに遠くからでも人はやってくる。私にとって、熊野古道なかへち美術館はそうしたことを教えてくれる場である。

（和歌山県立近代美術館
学芸課長　井上　芳子）

県立近代美術館エントランスにて

田辺市立美術館NEWS　ORANGE Vol.34
編集・発行：田辺市立美術館
発行年月日：令和3年4月1日

田辺市立美術館
〒646-0015　和歌山県田辺市たきない町24-43
TEL.0739-24-3770 FAX.0739-24-3771
http://www.city.tanabe.lg.jp/bijutsukan/

田辺市立美術館分館
熊野古道なかへち美術館
〒646-1402　和歌山県田辺市中辺路町近露891
TEL.0739-65-0390 FAX.0739-65-0393
http://www.city.tanabe.lg.jp/nakahechibijutsukan/

編集後記

田辺市立美術館が開館25周年を迎える年最初のORANGEをお読みいただきありがとうございます。記念のコレクション展と特別展も予定しています。折り込みの展覧会案内とスケジュールをご覧ください。切り取って、折りたたんでお手元においていただければ幸いです。　（F.O.）

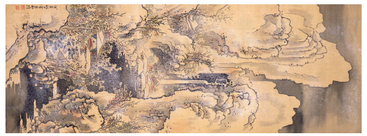
2021年度展覧会案内

1. 開館25周年記念コレクション展
Ⅰ．洋画の表現　Ⅱ．描の造形
開館25周年を記念して、コレクション中の近現代の秀作を4部構成で紹介します。第Ⅰ部は洋画、第Ⅱ部は描の作品を展示します。

2. 特別展
生誕120年　高橋周桑－モダンとロマン－
速水御舟に師事して日本美術院で頭角を現し、戦後間もなくに「創造美術」（現在の創造会）の結成に参画して、新しい時代の日本画表現の追求へと向かった、高橋周桑（1900－1964）の芸術を回顧します。

3. 開館25周年記念　特別展
紀の国ゆかやま文化祭2021　特別連携事業
きのくにの三画人
駒井兄弟の文人画コレクションを中心に
Ⅰ 祇園南海　Ⅱ 桑山玉洲　Ⅲ 野呂介石
江戸時代の紀州から輩出した三人の優れた文人画家、祇園南海（1676－1751）、桑山玉洲（1746－1799）、野呂介石（1747－1828）の作品を展観し、きのくにに息づいた豊かな文化を伝えます。

4. 開館25周年記念コレクション展
Ⅲ．日本画の革新　Ⅳ．水彩画の展開
開館25周年を記念する、コレクション展の第Ⅲ部と第Ⅳ部。近代から現代にかけての日本画と水彩画の秀作を展示します。



《夕凪－A》潮隆雄（1997）

1. 小企画展
鈴木理策
「見ること」を問い続ける現代の代表的な写真家、鈴木理策（1963－　）の作品を特集します。

2. 特別展　紀の国ゆかやま文化祭2021　作家連携事業
現代の織Ⅴ　中野恵美子
現代の織りた織の造形を紹介する展覧会シリーズの５回目。世界の装飾史や技法の研究と並行して、独創的な作品を発表し続けている中野恵美子（1941－　）の制作を展観します。

3. 特別展
土屋仁応　森の神話
仏像彫刻の古典技法を応用し、動物や幻獣をモチーフにした神秘的な造形を制作し続けている、土屋仁応（1977－　）の近年の作品による展覧会を開催します。

■くまびで作ろう①
講師のアーティストと参加者が一緒になって作品をつくるワークショップ「くまびで作ろう」の第１回。作った作品は展示して、公開します。

現代の織Ⅴ　中野恵美子

《連なり　カンボジアンレター》2008(平成20)年　個人蔵